

NTS基礎研究所

佐伯は権藤のお供をして、NTS基礎研究所を訪問した。玄関には、研究所長の鈴木健司がふたりを出迎えた。鈴木は、東都大学理学部の教授を定年退官したあとに、この研究所に招聘された。バイオ関係の世界的権威で、NTSの研究所では、鈴木の子弟の多くが、バイオテクノロジーの研究に従事している。

NTSでは、タバコ生産から、バイオテクノロジーを核とした医薬品や食品の販売に事業の中心をシフトしようとしていた。このため、新製品の開発に力を入れてきたのである。しかし、研究所から新製品がすぐに生まれるという考えは甘かった。NTSにとっては新規でも、すでに製品は世に出回っている。自社で開発するよりも、他企業を買収して、その技術を手に入れた方が手っ取りはやいのである。つまり、研究などに金をかけるよりも、資金力があるならば、他企業を買収して、その技術を取り込んだ方が事業拡大には向いているのだ。権藤は、研究所の大幅縮小を考えていた。

基礎研究所の応接室は、本社のそれよりも立派なくらいであった。所長の鈴木は、権藤を部屋に案内した。

「鈴木先生。本日はお忙しいところを、私のために時間を割いていただきありがとうございます」

権藤は、丁寧なあいさつをした。鈴木は、社長の権藤にも臆するところがない。自分は、会社に世話になっているというよりも、請われて来てやったという感覚が強いからだ。しかも、NTS社長は、財産省の天下りである。いわば、お飾りのような存在で、いままで研究所の研究内容に興味を示すものなどひとりもいなかった。

だから、鈴木は、社長の名前など、ろくに気にもとめていなかった。どうせ、三年もすれば、すぐに交代するからだ。自分は、東都大学を退官して、すでに一〇年以上も研究所に勤めている。考えてみれば、歴代社長よりもはるかに長くNTSに勤めていることになる。

「いや、とんでもありません。社長に研究所にお越しいただけるなど、光栄の至りですな」と鈴木は心にもないことを言った。

鈴木は、社長の研究所訪問にあたってのスケジュールを説明しだした。まずは、研究所見学をしてもらい、その後、講堂で、最近のトピックスを五つほどを研究室長に発表させる。技術に疎い文系の権藤のために、開発した製品を手にとって分かるよう実物も用意していた。

しかし、権藤は機先を制した。

「本日、訪問しましたのは、研究所を見学するためではありません。残念ながら、時間はそれほど、とれませんので、今日は、研究所の幹部クラスに、社長としての所信表明をお

聞き願おうと、やってきました」

所長の鈴木は、秘書に向かって、文句を言っている。そんなことは一言も聞いていないからだ。実は、NTS基礎研究所は、鈴木 of 私的研究所といっても過言ではない。研究費はNTSから出ているが、研究内容は、すべて鈴木 of 自由にまかされていた。しかし、そのために、NTSにとって魅力ある成果が得られていないというのも確かである。

研究所の講堂に、急遽、研究室長クラスの人間が集められた。総勢、五〇名ほどであろうか。権藤は、学者然とした研究者を前に講演をはじめた。

「忙しい研究者の皆さんの貴重な時間を割いていただきありがとうございます」

そして、権藤は、それまでは、ふんだんな予算のもとに自由な研究を謳歌してきた研究者達を震撼とさせる話を始めた。

「社会的公器としての民間企業には、社会に貢献する役割があります。その点、NTSは、かつては財産省の外局であり、その後、公社となったという経緯もあり、その社会的な責任は重いと考えております」

研究室長たちは、いったい権藤がどんな話を始めるかと興味津々である。いままで社長が、研究所に顔をみせることなどなかったからだ。

「その観点では、当基礎研究所は、日本のバイオテクノロジーの基礎研究に貢献するという社会的責任を果たしてまいりました。しかし、NTSは、あくまでも民間企業です。これからは、企業のための研究ということを第一義に考えていただく必要があります」

鈴木 of 目が大きく見開かれるのを佐伯は気づいた。

「さらに、NTSは、本研究所の成果を、医薬品や食品の新開発に生かそうとがんばってまいりましたが、ほとんど成果が得られていないのも確かです。そして、いまだにNTSの事業の九十九パーセントはタバコ販売に頼っています。そこで、今回、私は一大決心を致しました。基礎研究所は閉鎖し、あらたに、タバコの研究に焦点を絞った研究所に改組致します」

ここで、鈴木は何を言い出すんだというように間に入った。

「権藤社長、そんなことは一言も相談を受けておりませんぞ。かつてに、そんな大事なことを決められては困ります」

「鈴木所長。おっしゃることはよく分かります。これは、あくまでも、わたし個人の考えであります。ただし、役員全員の承諾は得ております。いずれ、次回の株主総会で正式な承認を得る予定です」

「しかし、そんなことを言われても、ここにおける連中はどうなるのですか。まさか、ほっぴり出すというわけではないでしょうな」

「もちろん、研究所に残りたいという研究者がいれば、その希望は受け入れます。そのかわり、研究テーマは、社の方針に従って、変えていただきます」

「そんな無茶な。いまさらテーマを変えろと言われても、研究というものは、そんな簡単なものではない。素人はこれだから困る」

「鈴木所長、確かに、NTSは資金的には恵まれております。タバコ販売も順調に伸びています。しかし、今後、タバコに対する規制が強化されれば、いつ何時倒れてもおかしくない状況にあるのも事実です」

「それは、わたしも承知しておる。だから、新しい事業に転換するための研究をしているのではないか」

権藤は鈴木の方を見た。

「すでに、本研究所が発足して一〇年が経過しています。残念ながら、新規事業として生まれたものは、本研究所からは一件もありません。すべて、他社を買収して、生まれたものです」

鈴木は言葉につまった。確かに自慢できる成果は、いまのところ出ていない。

「NTSの本業はタバコです。研究も、それに特化すべきと考えています」

「しかし、タバコなんかは毒以外の何者でもない。そんなことを研究したところで、社会には何の貢献もできないでしょう」

権藤は宣言するように言った。

「わたしは、必ずしもそう思っておりません」

急に、講堂内が騒がしくなった。はじめは冗談かと思っていたが、どうやら権藤の決意は固いらしい。

鈴木は怒鳴るように言った。

「わしは、自分の弟子たちを路頭に迷わすようなことはしたくない。こんな案は絶対に呑めない」

「社長はわたしです。あなたではありません。それに、時間はまだあります。先ほども申しましたように、わたしの考えに賛同していただき、このまま研究所に残りたいというひとには、このままNTS社員としての処遇を約束します。決して、みなさんを路頭に迷わすようなことは社会的責任のある企業としていたしません。このことだけは約束しておきます」

そう言うと、権藤は壇を降りた。鈴木は、権藤を睨んでいる。権藤は、佐伯を促すと、研究所を後にした。

佐伯は、権藤のことを見直していた。実は、NTS基礎研究所は、社員からもお荷物と揶揄されていたのである。研究所の職員の待遇は、一般社員よりも格上である。研究室長は部長クラスの給料をもらっている。しかも、国際会議などは、自由に参加を許されていた。それにもかかわらず、成果らしいものは何一つ出てきていない。これでは、他の社員の士気に関わるというものである。

タバコの研究所に生まれ変わる必要があるかどうかには議論がありそうだが、かと言って、研究所廃止となれば、そちらの方が物議をかもすであろう。

鈴木は、鳴り物入りで、東都大学から招聘した一流研究者である。学会に対する影響力も強い。いままでの社長に遠慮があったのも確かである。権藤は、それに決着をつけたの

だ。

それから、一週間ほどして、鈴木から辞表が届いた。しかし、研究室長クラスからの辞任の申し出はなかった。もちろん、辞任を希望していても、つぎの職がすぐに見つかるわけではない。鈴木は、もうすでに七〇歳を過ぎており、年金ももらえる。職を失っても、生活には困らないのである。

民衆党

先ほどから、田中の提案に、幸田が噛み付いている。

「田中先生。そんな提案はとてども呑むことはできません。国会内は完全禁煙。これが原則でしょう」

「幸田君。君の言うことは良く分かる。しかし、国会議員には喫煙者が圧倒的に多いんだ。その辺の事情も察して欲しい」

「それは、分かっております。いまだに国会内で喫煙が禁止されていない理由も、その辺にあります。しかし、健康推進法が可決されて、世の中では受動喫煙に対する監視の目が厳しくなっています。いくら喫煙者の数が多いといっても、世論を味方につければ、いっきに国会を全面禁煙に持ち込むことも不可能ではありません」

「だけど、多くの国会議員はタバコと健康は関係ないと豪語しているのも事実だよ。赤木なんかは、テレビの前でも平気でプカプカやっておる。与党だけでない。わが民衆党でも、黄門様と呼ばれて浮かっている渡辺幸一さんもタバコは健康にいいなどという暴言を吐いている。国会議員がいかに低レベルかということは、君らもよく分かっているだろう」

田中は思っていた。レベルが低いのは、国会議員だけではない。そんなバカを選ぶ国民のレベルも低いのだと。しかし、幸田は妥協しない。

「だからこそ、いまがチャンスなのではないですか」

「しかし、このままだと、平行線をたどるだけで、いつまでたっても国会は禁煙にはならないぞ。これ以上、あのバカな連中の吐く毒ガスを、われわれが吸うという状況を放置するわけにはいかないのではないか」

すると、そこに、女性議員の山科が割って入った。

「完全分煙ならば、赤木さんも納得するということですか？」

「ああ、そうだ。何とか喫煙派を説得すると言っている。ただし、喫煙室は、たこ部屋ではなく、立派なつくりにしてくれという要求はあるがな」

山科は、「国会からタバコを追放する会」の発足を提案した女性議員である。

「禁煙運動がさかんになっているのに、国会だけがなぜタバコが自由に吸えるのか？」

山科は、民衆党だけではなく、与党の女性議員にも声をかけ、この会をスタートさせた。すぐに、自由喫煙を苦々しく思っていた田中が会長就任を申し出た。いまでは、五〇名ほどが会員に名を連ねている。

山科は少し考えてから

「所定の場所以外での喫煙を禁ずるという約束が守られるなら、その案も一考する価値はあると思います。いままで、われわれがどんなに受動喫煙の被害を訴えてきても、耳を貸さない議員が多かったですからね」

田中はほっとしていた。山科がそう言ってくれると心強い。

幸田はふたたび噛み付いた。

「山科さん。それだったら会の名前を変えなきゃいけないよ。『国会からタバコを追放する会』という看板を下げ、『国会から受動喫煙を追放する会』としなければならない。大幅な後退だよ」

「でも、このままでは埒が明かないのも確かよ、幸田君。ここは、まず、完全分煙からはじめるというのが賢い選択かもしれない」

田中は、山科の支援を得たことで、会の大勢が自分の考えに移行するのを感じていた。最後は、幸田もしぶしぶ賛同してくれた。

「よし、後は、赤木と交渉に入ろう」

幸田は、まだ不満そうに言った。

「しかし、喫煙所をつくると言っても、予算はどうするんですか」

「とりあえずは、どこかの会議室をひとつ喫煙部屋とすることを考えている。そこに、排煙設備をつけるだけならば、そんなに予算もかからないだろう」

田中事務所

田中は、権藤の秘書が届けてきた紙袋を机の上に置いて、どうしたものか悩んでいた。先ほど、数えたところ、現金で三〇〇〇万円ほどある。現金は、喉から手が出るほど欲しい。党から出る政治資金だけでは、とても事務所を切り盛りすることはできない。

かつては良かった。田中が民自党にいた頃は、金がいくらでも手に入った。派閥に属していれば、選挙資金といってボスから現ナマが届いた。盆や正月にも、うなるような金が届けられた。選挙はすべて金、いかに飲まして食わして、権益を選挙民に回すかであった。

高度経済成長の頃は、それで良かった。しかし、時代が変わった。成長は止まり、上昇の一途であった株が突然暴落した。その結果、国中が苦境にあえいだのである。政治の金に対する目も厳しくなった。金権政治に疑問を覚えていた田中は、尊敬する先輩の小川とともに民自党を出て、はじめての野党政権の実現に貢献した。しかし、小川は自分の気に入らない社会党を切り捨てた。それに怒った、社会党がなんと不倶戴天の敵であるはずの民自党と手を結んだのだ。

政界の一步先は闇というのが、本当に分からない。その結果、日本の政治は、もとの金権政治に逆戻りすることになった。田中も、野党に甘んじることになり、政治活動のための資金も与党時代の半分以下に減ってしまった。

田中が驚いたのは、民自党では泡沫と呼ばれていた大泉が総理大臣になったことである。

民自党も変わった。大泉が勝利宣言をしたとき、田中はしみじみそう思った。

さらに驚くことに、大泉は、悲願の郵便局の民営化を実現した。この政策は、田中も、日本の将来のためには必要と考えていたが、実現することは、まず不可能だと思っていた。というのも、与党は特定郵便局長会という強力な指示団体をかかえており、民衆党は、郵政組合という支持団体を抱えている。双方にとって、郵便事業の民営化は支持団体の反発を買う問題であったからである。しかし、大泉は国民の支持をバックに、この不可能と思われていたことを実現してしまった。

田中はあせった。本来は、野党の民衆党が率先して進めるべき改革を、与党の民自党が進めている。しかし、大泉だけが改革派であり、他の多くの与党議員は、いまだに利権政治に頼っている。それが、現在の政治のゆがみを招いている。その代表が赤木である。古いタイプの政治家を駆逐する。それが田中の願いであった。そうなれば、大泉と組んでもよい。大連合という考えだ。

とは言え、野党に甘んじていると、政治活動のための資金が不足するのも事実であった。自分のやりたい政治が思うようにできない。しかし、野党では、思うように金集めができない。

田中は、権藤が電話で連絡した時のことを思い出していた。国会内を完全禁煙ではなく、完全分煙ということで「国会からタバコを追放する会」のメンバーを説得したと報告したら、権藤は本当に喜んでいた。

「さすが、田中先生。先生にお願いして正解でした」と感謝の言葉を繰り返した。

問題は、喫煙所をどうするかであるが、与党の大物の赤木が、喫煙所設置案に賛成している以上、大した問題にはならないだろう。問題は、首相の大泉であるが、それも何とかなるだろう。大泉が首相になって、はじめて閣議を禁煙にした。それでも、議員からの反発はものすごかったという。幸い、閣議のメンバーでは防衛大臣だけが喫煙者だったので、すんなり禁煙と決まったようだが、関連団体からは、毎日のように抗議の電話が鳴り響いたという。そんな思いをするならば、分煙で納得してもらえば、それに越したことはない。大泉もそう思ってくれるだろう。

田中の悩みは、権藤から届いた現金である。明らかに、政治資金規制法違反であるが、NTSにも記録は残らないという。田中が、黙っていれば、問題のない金である。しかし、自分は、こんな政治を打破するために、野党に移ったのではなかったか。田中は、悩んだ末、権藤の好意に甘えることにした。

禁煙外来

佐伯がNTSの社長室長と名乗ると、医師の塩谷由紀子は、最初はけんもほろろな対応であった。しかし、何とか時間を割いてもらいたいとお願いして、権藤との面会を取り付けた。塩谷は、禁煙外来という治療を日本で始めて取り入れた禁煙運動のカリスマ的存在

である。テレビにも、しょっちゅう顔を出し、喫煙の害を訴えている。塩谷のもとを訪れ、禁煙に成功したものも多い。

塩谷は権藤の挨拶もろくに聞かずに、けんか腰であった。

「いったいN T Sの社長がわたしに何の御用でしょうか。特に、話すこともないと思いますが」

「まあ、先生、そう興奮なされずに、わたしの話も聞いてください」

権藤は諭すように話した。

「先生、実は、わたしも、ここにいる佐伯も大のタバコ嫌いなのです」

塩谷は驚いた顔をしている。

「それが、何の因果か、タバコ会社に勤めております」

「それならば、さっさと会社を閉じたらどうなんですか」

「なるほど。それはいい考えですね」

権藤は鷹揚に笑った。

「先生、残念ながら、そう世の中は簡単ではないのです」

「しかし、タバコ会社がタバコの販売をやめれば、すべてが解決します」

「タバコ会社は何もN T S一社ではありません。フィリップモーリスや、B A Tなど、世界には、数多くのタバコ会社が存在します。いまN T Sが営業をやめれば、外国のタバコ会社が大量して日本市場にやってくるでしょう」

「わたしは、なにもN T Sだけのことを言っているわけではありません。外国のタバコ会社すべてにも同じことを言いたいのです。あなた方は、殺人の肩代わりをしているのですと」

「ほお、かなり過激な発言ですな。しかし、それでタバコ生産はストップするでしょうか」

「いますぐとは言いません。しかし、時間をかければいずれは可能でしょう」

「医者立場の先生からすれば、それが正論かもしれません。しかし、先生にお聞きします。日本の医者の喫煙率は諸外国に比べて異常に高い。その事実をご存知ですか？」

「もちろん知っています。困ったことと思います」

「日本医者連盟の重鎮にも喫煙者は多いでしょう」

塩谷は黙っている。

「本来は、喫煙を厳しく戒める立場の医者が平気で喫煙する。それが、日本の実態なのです。最近、ようやく病院が禁煙になっていますが、少し前までは、待合室には灰皿が当たり前のように置いてありました。タバコの苦手なわたしには、とても耐えられないことでしたよ。病気を治しに来ているのに、その原因になる毒ガスが病院で平気でばら撒かれている」

「それに対しては、わたしもかなりの努力をしてきました。そのおかげで、ほとんどの病院では禁煙になっているはずですよ」

「確かにほとんどの病院では堂々とタバコは吸えなくなっています。しかし、いまだに灰皿を置いてある病院も少なくありません。それに、禁煙と言っても、必ず喫煙所がありま

す。そこから、漏れてくるタバコの煙で、患者は受動喫煙の危険にさらされている。塩谷先生の努力には敬意を表しますが、いまだに、日本の医者レベルというのは、その程度なのです」

「医者レベルの低さは認めますが、だからと言って、喫煙が正当化されるわけではありません」

「おっしゃるとおりです。しかし、あれだけタバコ規制の厳しい外国にあっても、タバコ販売を禁止するところまでは行きません」

「いずれは、禁止になるものと期待しています」

「まず、無理でしょう。その理由はお分かりですか」

塩谷は、権藤の真意を測りかねているようだ。NTSの社長でありながら、タバコに対して厳しい意見を開陳している。塩谷が黙っていると、権藤が続けた。

「政治ですよ。正確には政治と金です。世の中から戦争が無くならないのと同じことなのです」

「戦争とタバコを同じ次元で話すのはどうかと思います」

「よろしい。本音で行きましょう。実は、タバコは国家にとっての重要な収入源なのです。日本で言えば、タバコ税による収入。これは、結構バカになりません」

「しかし、タバコが原因となる医療費の余剰負担は七兆円といわれています。タバコ税では、とても賄えません。」

「それこそ、机上の計算でしょう。それに、タバコ税は財産省に入るが、医療費は保健省の管轄です。もちろん、国家レベルでの収支では、先生のおっしゃるとおりでしょうが、この国では、国益よりも省益の方が優先するのはご存知でしょう」

「それでも、いずれ国民は分かってくれると思います」

「それでは、タバコに対して規制の厳しいアメリカの例を見てみましょう。なぜ、アメリカでは、依然としてタバコ会社は巨大な超優良企業なのでしょうか」

「それは、わたしには分かりません」

「確かに、アメリカ本土での消費は下降傾向にあるかもしれませんが、アメリカもかつては喫煙天国でしたからな。タバコによる健康被害が、これだけ喧伝されているのですから、報道の自由が保障されている国では、タバコの消費が減ってもしようがないでしょう。しかし、アメリカのタバコ会社の経営は安定しています。それは、彼らが、世界に市場を見つけたからなのです。国家としても、輸出額が増えることは大歓迎です。かつて、日本ではタバコに大きな関税がかけられていました。ところが、アメリカ政府の要請で、タバコの関税は引き下げられました。おかげで、かつては洋モクとして庶民には高嶺の花であったアメリカタバコが、日本のタバコと変わらない値段で買えるようになっているのです」

「NTSがタバコの販売をやめても、外国のタバコ会社が利益を得るだけだと言いたいのですか？」

「それもありますが、タバコが禁止にならない理由は、はっきりしています。アメリカの

タバコ会社は、政府にも巨額の献金をしています。税金もはらい、政治資金も援助してくれる。しかも貿易黒字に貢献するとなれば、政府としては支援したくなるのも道理でしょう」

「それでも、アメリカ政府は、タバコに対しては厳しい規制をとっていますよ」

「もちろんです。それでも、タバコの生産や販売を禁止することはできない。そんなことをしたら、輸出先の国から責められます。お前の国は、国民に販売できないようなものをわれわれに輸出しているのかと。それでは、アヘンを中国に輸出したイギリスと同じだと非難されます」

塩谷は考えている。

「政治の世界では、巨額の金がからむと、理屈では通らないことが平気でまかり通るので。イラク戦争も、軍需産業からの要請で始まったことは、誰でも知っています。あれだけ、大統領が世界から非難を受けても、誰からみてもデタラメとしか思われぬ理由をつけて戦争をはじめたのも、すべて金が絡んでいるからです」

「しかし、そんな政権は長くは持たないと思います」

「先生、政権につくには金が必要です。また、政権を維持するためにも金は必要です。それは歴史が証明しています。登場した当初は清新といわれている政治家でも、何年か政権の座にいれば、必ず腐敗します」

塩谷は、もういいとばかりにクビを振った。

「そんな話をするために、今日いらしたのですか？」

塩谷は話題を変えたいようだ。

「もちろん、こんなことを言うために来たものではありません。ただ、先生に話をお聞きする前に、先生の理想とするタバコのない社会の実現は、現実問題として難しいということをお聞きして欲しかっただけです」

「そうですか。それでは、権藤さんの理想はなんですか？」

「わたしの理想は、先生と違って、喫煙者と非喫煙者が互いに不愉快にならずに共存共栄できる社会です」

「共存共栄？そんなことできるわけがないじゃないですか」

「厳密には難しいかもしれませんが。しかし、排煙機能の完備した喫煙所を日本中に配置する。これがわたしの考えです。大企業や、立派な公共施設では、このような共存環境が、かなり整えられてきています。これを、日本全国に広めたい。これが私の理想です」

「そんな無駄な投資をするよりも、全面禁煙にする方がよほど簡単です」

「しかし、先生。それでは、議論は平行線をたどるばかりで、受動喫煙の被害を食い止めることはできません。おそらく、議論が長引いて、かえって非喫煙者の被害は拡大することでしょう」

「権藤さんの意見に一〇〇パーセント賛成することはできませんが、ある程度は、理解できます」

塩谷はようやく権藤に対して胸襟を開いたようだ。

「本日、先生のもとを伺ったのは、喫煙者の中でも、禁煙を希望しているひとたちの心理をお聞きするためなのです」

「それがNTSのためになりますの？」

「ええ、大いに参考になると考えています。NTSは、喫煙したくない人には、ぜひタバコを止めて欲しいと思っています。本当に吸いたいひとだけに吸ってもらえばいい。それが本音です」

「それでは、会社がお困りにはならないの？」

「そうは思っておりません。喫煙者には、はじめっから禁煙など考えずに、わが社の優良顧客となってくれている人たちもいます。あえて言えば、中途半端に止めたいと迷っている顧客は迷惑なのです」

「迷惑。それはどういうことかしら？」

「禁煙しようなどという人間は、タバコの本数もできるだけ抑えようとしているはずですから、もともとわが社にとっては、いい客とは言えません。しかし、うじうじと禁煙につとめる。そして、失敗する。これでは、まわりの人間は、タバコに対して偏見をもってしまう。まるで麻薬のようだ。その期間が長引けば長引くほどわが社に対する印象も悪くなります。ですから、そんな人にはきっぱりやめて欲しいのです」

「なるほど。よく分かりました。どこまで、参考になるか分かりませんが、私でお役に立てることには協力いたしましょう」

塩谷の態度からけんか腰がとれて、権藤は、安心した。

「禁煙したいと思っているひとは、ある程度、自分のことを知的レベルが高いと感じているひとが多いと思います」

「ほお、それはどういうことですか？」

「多くのひとは、喫煙の健康被害に対して、正確な科学的知識は持っていません。しかし、世間で喫煙の問題が取り上げられているので、知性の高い自分が、喫煙していることに居心地の悪さを感じています。そういうひとは、世間体も、ある程度気にしますからね」

「それで禁煙を決意する」

「そうですね。ただし、残念ながら、自分が重症のニコチン中毒になっているということ、ほとんどのひとが認識していません」

「それは、意思がしっかりしていれば、禁煙できると思っているということでしょうか？」

「その通りです。しかし、中毒の度合いによりますが、多くのひとは中毒症状には勝てません。一種の病気ですから。もちろん、中には、例外もおりますが、自己流では、ほとんどのひとが禁煙に失敗します」

「確認したいのですが、禁煙をしようというひとは知的レベルが高いということですか？」

「いえ、それは正確な表現ではありません。自分で、知的レベルが高いと思いこんでいる人と言った方が正確でしょう」

「まあ、そうですね。本当に知的レベルが高ければ、はじめから喫煙などしないでしようから」

「ところが、素人の禁煙は、まず、失敗します。それは、精神力で克服できているからです。しかし、ニコチンの禁断症状は、そんなに甘いものではありません。下手をすると、イライラがつのって職場でトラブルを起こすこともあります」

「そうですか」

「自分で克服できると思っていたのに、それができない。すると、自分に自信を失ってしまう。自己嫌悪の裏返しで、自分は二度と禁煙などするものかと依怙地になるひとも多いのです」

「それで、先生はどうされているのでしょうか？」

「私のところでは、精神的なケアとともに、ニコチン中毒を緩和する医学的処方をしていきます。具体的には、ニコチンパッチという貼り薬を使って、ニコチンを摂取するようにします。そのうえで、次第にその量をコントロールして行って、最後にはニコチンを体内から消し去ります」

「やはり、医学的治療が効果的ということですね」

「そうですね。精神論だけでは難しいと思います。ただし、受動喫煙が子供に悪影響を与えるということを伝えることも効果的です。自分の愛するものを自分が危険な目にあわせているという事実には、みなさん一様に驚かれます」

「そうですか。とすれば、精神面もやはり重要ということですね」

「そうですね。」

「それと、話題が変わりますが、喫煙者は、常にプレッシャーにさらされているということが最近分かってきました」

「それは、どういうことですか？」

「一本のタバコで、禁断症状が緩和される時間は非常に短いのです。すると、すぐに、喫煙者はタバコが吸いたくなります。しかし、タバコの吸いすぎはよくないと思っているひとも多いので、少し我慢します。これが精神的な負担を引き起こします。もし、禁断症状を出さないように喫煙するとしたら、一日二〇〇本以上が必要になります。ですから、これより本数の少ない喫煙者は、吸いたいけど吸えないというプレッシャーに常にさらされていることになります」

「なるほど。でしたら、喫煙者に、安心感を与えるためには、ずっとタバコを吸い続けてもらえば言い訳ですね」

「まあ、そうも言えますが、それでは、普通のひとは仕事になりません」

ここが潮時とばかりに、権藤は礼を言った。

「先生、本日は、お忙しい時間を割いていただきありがとうございます。また、大変ためになる話をお聞きすることができました」

塩谷は

「権藤さんが嫌煙家ということをお聞きして安心しました」

と言っている。最初の険悪なムードとは大違いだ。権藤は佐伯をともなって、塩谷クリニックを後にした。

佐伯は、権藤の意図が分からなかった。いったい、権藤は、何が本当の目的で、塩谷とあったのだろうか。権藤の自説の完全分煙を、塩谷に訴えたところで、何も得られることはない。塩谷は、そんなことは薦めないであろう。